

5. 座右の銘

人間万事塞翁が馬、人生明日は何が起こるかわからへん

黒田周悟氏の大切にしている言葉は、「人間万事塞翁が馬」である。

今から二千年以上も前に成立した思想書『淮南子』（内書 21 篇のみ現存）の第 18 篇「人間訓」に載っている故事が由来である。同書は、前漢高祖の孫であり淮南の王であった劉安（紀元前 179 年～紀元前 122 年）が道家、儒家、法家など多くの思想家を援助し、これらの協力を得て当時の道家思想を体系化しようとした試みのひとつである。

故事には、国境の塞の近くに住んでいた占い好きの老人が登場する。ある日、この老人が飼っていた馬が逃げ出してしまい、近所の人たちが同情するも、老人は「これは幸運の兆しだ」と言う。老人の言ったとおり、逃げた馬は立派な馬を連れて帰ってきたので、近所の人たちが祝福すると、老人は「これは不幸の兆しだ」と言う。すると、老人の息子がその立派な馬から落ちてしまい、足の骨を折ってしまったので、近所の人たちが同情するも、老人は「これは幸運の兆しだ」と言う。事実、息子は骨折のおかげで戦争に行かなくてすんだ。

故事が意味するところは、「人生における幸不幸は見極めが難しく、幸が不幸に転じることもあれば、不幸が幸に転じることもある」である。まさに、「人生明日は何が起こるかわからへん」である。

だからこそ、一日一日を大切に生きること、そして日々コツコツと積み上げること

「人間万事塞翁が馬」だからこそ、黒田氏は、一日一日を大切に生きることが大事である、と考えている。そして、人間ができることは、日々の積み重ねによって生み出すものがせいぜいであり、人

生は何が起こるかわからないからこそ謙虚に生きることが大事である、と考える。黒田氏の若者へのメッセージでもある。

若い世代の人たちには、ぜひこの業界を引き継いで欲しいと、黒田氏は願う。先人が築いてくれた産業の灯火を消すことなく、次に繋げて行って欲しい。

今治地域のタオル工業のみならず、日本の地域産業は、現在深刻な後継者問題に直面している。しかし、地域の経済を支えてきたモノづくりを継承していくことが、将来の日本経済の発展にも繋がる。少子高齢化や経済のグローバル化のさらなる進展において、日本のモノづくりをとり巻く環境はより一層厳しい状況に置かれている。黒田氏は、そのなかで自分にできることをこつこつと、今日も明日も明後日も地域のために仕事をする。

6. おすすめの本

黒田氏の父・春夫氏は生涯で8冊の本を自費出版している。黒田氏推薦の本はこの8冊の本である。表4は出版年の順にまとめたものである。

春夫氏は、1917年4月18日の大正生まれであり、大正・昭和・平成の激動の時代を生き抜いた。とくに春夫氏の人生に大きな影響を及ぼしたのは、戦争による2回の出征経験である。1回目は日中戦争で中国へ（1939年湖北省武昌到着、1941年召集解除のため帰還）、2回目は太平洋戦争でフィリピンへ（1943年応召、1944年マニラ到着、1945年9月12日～1946年10月8日捕虜生活、1946年10月22日帰今）出征した。

苦しいなかにも敗戦後のフィリピンでの抑留生活において、尊敬できる戦友との素晴らしい出会いがあった。言葉少なく静かな男であったが、強運の持ち主であり魅力に溢れ、名前を「シュウゴ」と名乗った。この戦友が言った言葉が春夫氏の抑留生活における励みになった。黒田氏が父親から聞いたエピソードであるが、この戦友

の名前をもらって、黒田氏は「周悟」と名付けられた。実は、この「シュウゴ」という戦友について、春夫氏が『アイツ』の思い出（『妻あり 子ありて』74-75頁）で言及している。アイツとは、山形県出身の高橋周吾と言う。黒田氏と一字違いである。アイツが春夫氏に言った言葉は、「世の中はすべてなるようにしかならないのだ、アンタもワタシも死ぬ運命にあるのであれば死ぬ、生きれる運命ならば生きのびる事が出来る。」（『アイツ』の思い出『妻あり 子ありて』74頁）

春夫氏は1999年に83歳でこの世を去ったが、8冊目を上梓したのが1998年である。黒田工藝の代表取締役社長を務めながら、晩年は執筆活動に勤しんだ。

表4 黒田春夫氏の8冊の著作

タイトル	印刷所	出版年度
『慟哭』	原印刷（株）	1987年
『慟哭』（補遺）	原印刷（株）	1989年
『木洩日』	原印刷（株）	1991年
『羣有』	原印刷（株）	1992年
『流れて止まず』	原印刷（株）	1993年
『臨古』	原印刷（株）	1995年
『妻あり 子ありて』	愛和印刷（株）	1997年
『戦旅遥かなり』	クラウン樹脂加工（株）	1998年

春夫氏の8冊の著作は、自らの戦争体験が根底に流れている。『慟哭』は、「支那事変から大東亜戦争へと、想えば長い従軍の旅」について実体験を詳細に記録したものである。「平和への希は人間の本性と云うものであろうが、時と場合で流動的だとも云える」（6頁）という言葉が心に刺さる。戦争下では人間の理性は何の役にも立たないことへの失望、「お国のため」と「家族への思い」と「戦友の死」の間にある矛盾を痛烈に感じながら葛藤する姿が窺われる。「私は、

戦地に身をさらした貴重な若い日の青春時代を戦争に捧げた。この若い時期だけでなく、その後ずっと私の考え方や感じ方等、私の生き方そのものに、私には戦争は大きな影をおとしているのである」（269頁）と述べられているように、春夫氏の人生は戦争と切り離しては考えられない。

つづく『慟哭』（補遺）は、『慟哭』で書ききれなかった内容を追記したものであり、その目的は「私には戦争体験を徒に美化するのでも、また懺悔するようなものでもなく、事実の堆積を、思い出すままに見つめたものであり、精一杯に子供達に残したいのである。そして、戦争はやってはならぬと、声を大にして叫び続けたいのである。」（5頁）



春夫氏の遺した8冊の著作

その後には上梓された著作はいずれも随筆集であるが、詩・俳句集でもある。『木洩日』では、春夫氏が戦後をどう生き抜いたかが生々しく語られている。『羣有』では、春夫氏の「第二の人生」を詩・俳句とともに振り返っている。『流

れて止まず』は、1992年にそれまでの中国への旅を「戦旅の思い出」として整理したものである。『臨古』は、戦後50年の節目として書かれた戦争体験記であり、「あとがき」には「戦争の惨劇も知り尽し日本の戦後社会の繁栄も見てきた私だが、“九死に一生を得た”ことが私の総てだが、私は幸一杯の戦後」であったと感謝の言葉が記されている（『臨古』291頁）。『妻あり子ありて』は、「激しく移り変わる時代の流れの中で一瞬の感動を、その時々にとらえ」（「まえがき」）、「妻あり子ありて」の戦後の人生を幸せに暮らしていることを綴ってある。そして最後の著作となった『戦旅遥かなり』は、「それぞれの戦友に別れがしたい一念」で、もう一度戦争体験を回

顧したものである。

以上の8冊の本をとおして、春夫氏は「戦争は2度と繰り返してはいけない」という強いメッセージとともに、「時代」を伝えてくれている。生きて帰り、所帯を持ったことは春夫氏の人生に花を咲かせてくれた。そして、春夫氏は言う。「私の生涯通じての喜びは二人の子達の仕事への参画である。」（「飛躍の三十歳代」『羣有』135頁）

（完）

（文責・インタビュー：辻智佐子）

参考文献

飯田弘忠他「染料の昔と今」公益社団法人日本化学会『化学教育』第28巻1号、1980年、27-31頁。

今治捺染工業協同組合提供資料「組合員数・従業員数等推移（1975年～2014年）」。

今治捺染工業協同組合提供資料「捺染業界ビジョン調査事業報告書」1985年。

大迫正富編「昭和38年度ゼンリン住宅地図：今治市」善隣出版社。

（株）リウボウインダストリーHP（<https://ryubo.jp/company/>）。

住化ケムテックス（株）HP「技術資料 染料総論」

（<https://www.chemtex.co.jp/seihin/senryo/technology/>）。

トーヨーカラー（株）HP（<https://www.toyo-color.com/>）。

羽藤武[1992]『おごの川』自費出版まつやま（人の森出版）。

羽藤武[1998]『続・おごの川 私の戦争と平和』自費出版まつやま（人の森出版）。

林（株）HP（<http://www.hayashi.co.jp>）。

森光繁[1975]「技術革新で築いた今治タオル王国」日本地域社会研究所編『日本の郷土産業』新人物往来社。

編集後記

タオル製造のうち捺染プリント工程で初めて「タオルびと」に登場していただいたのが今回の黒田周悟さんです。インタビューを終えて、黒田さんの印象に残った言葉をキーワードにして3つご紹介します。

まず、「報恩謝徳」です。黒田さんは、お会いして開口一番に「今治の捺染の歴史は先人たちの努力と知恵の賜物なんですよ。わたしなんか前に出るのはおこがましいと思うんです」と繰り返し話されました。戦後今治タオル工業における捺染加工業は何もないところから始まったので、なるほど開拓者たちの存在は大きいです。その後、1990年代初頭には今治だけでも80社ほどの捺染加工業者がいたことから、今治タオル工業の発展が窺われます。

次に、「繊細な気遣い」です。インタビュー当日、本社到着と同時に、工場を案内してもらいました。わたしを含め、捺染工場の見学経験のない「タオルびと」制作プロジェクト委員会のスタッフへの配慮です（インタビューには委員会から3名参加しました）。案内の途中で黒田さんが、「コロナ禍の影響で受注が減って、インタビュー当日に機械が稼働しているか心配だったんですよ。でも、ちょうど昨日受注があって、今日稼働してますよ」とこっそり教えてくれました。

そして、「着眼大局」です。本文でも書きましたが、黒田さんは産地のことを考え、産地のために仕事をしています。タオルの分業体制のことについてお聞きした際、黒田さんは「産地が元気なら、それでいいんですよ」と話されました。黒田さんが産地内分業で協働してタオルをつくっている人たちと良い関係を築いているのは、分業の垣根を超えて産地を思う気持ちがみなさんに伝わっているからだと思います。

タオルの製造工程のなかでも捺染プリント加工は黒子的な作業です。しかし、染晒加工とおなじでタオルを華やかにし無限のバリエーションを生む作業でもあります。限られた時間でのインタビューでしたが、黒田さんのような人が産地の発展を支えているのだと改めておもいました。

午前10時に始まったインタビューは、お昼を挟んで3時間以上にも及

びました。お腹が鳴ったわけではありませんが、黒田さんはわれわれに気を遣ってランチに招待してくれました。まさに炊金饌玉、ごちそうさまでした。

次回の「タオルびと」

「タオルびと」の32・33人目は、城東刺繍の桧垣淳三・美賀子氏夫妻である。今治で最初にタオル専用の刺繍加工を事業としてスタートさせた老舗である。創業当時から現在に至り夫婦二人三脚でクオリティの高い刺繍加工を提供している。今治タオル工業の発展を支える二人にタオル人生を語っていただく。

